

“地元力”を生かした公開活動－聴竹居倶楽部の15年

一般社団法人 聴竹居倶楽部 代表理事

まつくま あきら
松隈 章

内閣総理大臣を3度務めた政治家・近衛文麿らが重要な会談を行い政治の表舞台となった時代の姿の「荻外荘（てきがいそう）」を創建の地 荻窪によみがえらせるという杉並区が進めている「荻外荘復原・整備プロジェクト」では、令和6年（2024年）12月に建物が公開されることになっている。その公開の参考事例のひとつとして「荻外荘」を設計した伊東忠太の教え子の一人、建築家・藤井厚二の自邸で国の重要文化財「聴竹居」（京都府大山崎町）の公開活動について紹介したい。

■ 地元と一体となった生きた活用へ

昭和3年（1928年）に竣工した「聴竹居」【写真1】は、昭和13年（1938年）に藤井厚二が亡くなったあと竹中工務店が取得するまでは藤井家が所有し続けてきた。昭和27年（1952年）に藤井家が引っ越したのちは長らく借家として使われてきたが、水廻りを含め大きな改造はなされなかった。借家人が居なくなり空家になった平成20年（2008年）春、「聴竹居」を藤井家から私が個人的に賃借し大山崎町の有志と共に任意団体の聴竹居倶楽部（2016年末に一般社団法人化）を結成し、その組織が主体となって公開することにした。当時は建築界でもその存在をあまり知られていなかった「聴竹居」。ましてや一般の方々にはなおさらである。そこで、公開・管理体制を整え、ホームページをつくり、予約制で一般公開を始めた。その後、日本全国各地からの見学者が徐々に増え、コロナ禍前にはその数は国内外から年間約1万人（平成30年（2018年）実績）にも達するようになった。



写真1 「聴竹居」全景



写真2 聴竹居紅葉を愛でる会 2022

通常の事前予約制の見学だけではなく新緑や紅葉に包まれた「聴竹居」を予約なしに気軽に見ていただく「愛でる会」【写真2,13-16】は、多くの方々が訪れる春と秋の恒例行事としてすっかり定着している。さらに、平成21年（2009年）に漆芸作家の「聴竹居との出会い-栗本夏樹展」【写真3-5】を、平成25年（2013年）に現代アーティストの「河口龍夫展」を開催し、「聴竹居」の空間と



写真3 「聴竹居との出会い-栗本夏樹展」2009案内チラシ



写真4 栗本夏樹展 会場風景①
(撮影；齋藤さだむ)

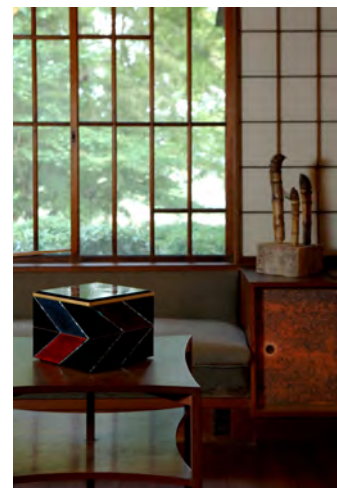


写真5 栗本夏樹展 会場風景②
(撮影；齋藤さだむ)

現代アートとの対話を愉しむ場としても活用してきた。こうした公開活用を手がけてきた聴竹居倶楽部は、私以外はすべて地元大山崎町の、それも徒歩圏にお住まいの方々である。実は、歴史的建造物を保存公開活用していくうえで、この“地元第一主義”が一番重要だと、私の過去の苦い体験から考えたからだ。いくら著名な有識者や専門家が評価しようが、そうしたよそ者だけでは駄目で、地域愛（シビックプライド）を持ち、心の底から愛着を持ち続けている地元の方々が居ない限り、地域に根差した建物を活用し次世代に遺すことは難しい。

■ 個人から企業の所有への転換と国の重要文化財指定

「聴竹居」も個人所有のままでは相続税や固定資産税、建物維持管理費などの負担が大きく、世代を越えて長期に維持して行くことは極めて困難だ。そこで、平成28年（2016年）末に土地・建物の所有を個人・藤井家から企業・竹中工務店へと転換し、日常維持管理と公開活動を地域住民が中心の一般社団法人聴竹居倶楽部が行うという形を創り、そのふたつが両輪となって持続可能な保存活用を担っていくことになった。そして、竹中工務店は、取得後すぐさま文化財指定に向けて動き、平成29年（2017年）7月末に国の重要文化財指定【写真6】を受け、国の助言や補助を得ながら「聴竹居」を国民的財産として未来永劫遺していくことになった。

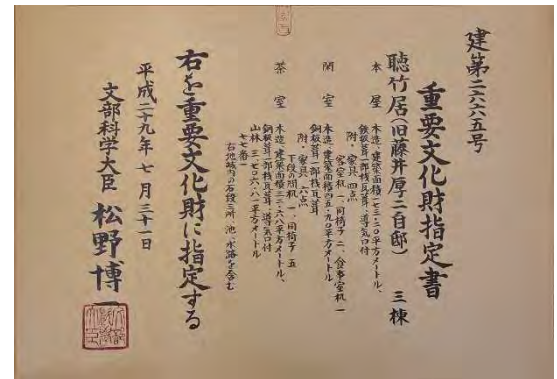


写真6 重要文化財指定書

重要文化財となった「聴竹居」の所有と運営の役割分担についてももう少し詳しく記すと、ハードな分野として土地・建物を所有し、随時、国庫補助等を含め予算化して、施設全体の維持管理、保存修理などを司るのが株式会社 竹中工務店、ソフトな分野として日常の維持管理と共に“愛でる会”や“講演会”などイベントの企画・実施、見学の受付業務や現地の取材・撮影対応、見学やゼミ利用時の藤井厚二や建物等の解説、藤井厚二アーカイブの整理・公開など、地元密着で細やかな運営を竹中工務店からの業務委託として行なっているのが一般社団法人 聴竹居倶楽部である。さらにソフトな分野で藤井家（藤井の次女の小西家）や地元の大山崎町に協力を仰ぐこともある。



写真7 「本屋」外観



写真8 「本屋」内観・居室から食事室を望む



写真9 「閑室」外観



写真10 「閑室」内観

■ 平成30年（2018年）に発生したふたつの天災で大きな被害を受けた「本屋」と「閑室」

昭和3年（1928年）の竣工以来、天災による大きな被害を受けることなく静かに佇んでいた「聴竹居」を2018年に大きな天災が2度にわたって襲い掛かった。6月の大阪北部地震と9月の台風21号である。

平成30年（2018年）6月18日朝7時58分に発生したマグニチュード6.1、最大震度6弱の



写真11 2018年6月18日大阪北部地震による被害

揺れとなった高槻市を震源とする大阪北部地震は、大阪管区気象台が観測を始めてから初めてとなる大きな地震だった。高槻市に程近い大山崎町もかつて経験したことの無い震度5強の激しい揺れに遭遇した。

「聴竹居」では、今まで割れたことが無かった縁側のコーナーサッシのガラスが割れ、外壁の土壁が一部崩れる被害に見舞われた。【写真11】



写真12 2018年9月4日台風21号による被害

一方、平成30年（2018年）9月4日に関西地方を襲った巨大な台風21号は、25年ぶりの非常に強い台風で、京都や大阪を含む西日本各地に最大風速（秒速）44メートル以上の強風と大雨をもたらし、京都府内の多くの社寺仏閣で倒木などの大きな被害をもたらした。「聴竹居」でも、屋根瓦がずれ落ち【写真12】、庇が風でぶっ飛ぶなどの建物そのものへの被害だけではなく、大きく育ったモミジの大木の枝の多くが折れ、緑に包まれた「聴竹居」を代表する景観が損なわれる大きな被害となった。

このふたつの天災の中での幸いは、被災直後、それぞれ自宅の安全確認を終えた地元のスタッフの多くがその日のうちに徒歩で「聴竹居」に駆けつけ、写真による被災状況の記録と連絡、割れたガラスの処理等の片付けをしてくれたことである。非常時の対応の成否は平時の取り組みが大切だとは良く言われることだが、「聴竹居」は地元のスタッフによる日常的な取り組みが活かされたのである。

■ 建物は動かないからこそ“地縁”として地域に根ざし繋がれる

偶然にも出会った「聴竹居」に平成8年（1996年）以来長年関わってきて今思うことは、ひとつの建物の持つ可能性の大きさだ。ひとつの建物が、人と人、人と自然、さらに人と地域、そして過去・現在・未来を“繋ぐ”、“地縁”として大事な存在だということである。

私自身経験した平成7年（1995年）阪神淡路大震災や平成23年（2011年）東日本大震災などの大災害に見舞われた時、建物や地域の風景が一瞬にして失われ、日常性が不可逆なものだと気が付かされ、それらの大切さや愛おしさを自覚することになる。ふだん何気なく暮らし、見ている建物や地域の風景から実は大きな影響を受けているし、それらは人生にとっての大切な記憶装置になっている。

「聴竹居」は、通常良くある自由見学ではなく、聴竹居の見学対応スタッフが建築家・藤井厚二の人物像、「聴竹居」の特徴や様々な工夫、時代背景、などを丁寧に約1時間近く見学者に解説することになっている。【写真13-16】そのために地元のスタッフが、「聴竹居」を通じて藤井厚二の「日本の住宅」と言う考え方や思い、日本の住まいの歴史、日本における建築の在り方、日本人の自然との付き合い方、大山崎町の歴史や文化などを自ら学習し習得してきた。その習得した知識を生かして自らの言葉で「聴竹居」を日本全国各地から訪れる見学者に解説をする。熱い思いが伝わり、見学終了時にお客様から拍手されることも多い。そうした積み重ねが、自分たちの住む町・大山崎を誇らしく思う“地域愛（シビックプライド）”“醸成の一助にも繋がっていくのだと思う。

地域と共に存在し続ける生きた建物には、“愛着の連鎖、継承”を支える“たてものがかり”の存在が不可欠だ。聴竹居倶楽部はまさに「聴竹居」の“たてものがかり”なのである。最近では「聴竹居」のご近所の方々が時間を見つけて立ち寄りおしゃべりする姿も日常的な風景で、まさに「聴竹居」が、地元第一主義の象徴＝地域のコミュニティセンターになってきている。



写真 13 聴竹居 新緑を愛でる会 2022 開催風景



写真 14 新緑を愛でる会にて解説する見学対応スタッフ



写真 15 新緑を愛でる会にて解説する見学対応スタッフ



写真 16 聴竹居 新緑を愛でる会 2022 終了後の関係者記念集合写真

“地縁”としてひとつの建物が地域に存続することで広がる可能性は以下4つになるだろう。

- ① 地域の歴史・文化を知る学習の場
- ② 地域が日本、そして、世界の人々と繋がる場
- ③ 地域の人々のコミュニティ形成の場
- ④ 地域の人々のシビックプライド形成の場

あたりまえのことだが、建物は移築でもしない限りは動かない。だからこそ、実物が元の場所に遺っていれば、地域の歴史や文化を記憶し、地域に根ざした存在であり続けて行くことが可能となる。

日本人の消費行動が“モノ消費”から“コト消費”へ、さらに、近年では、再生不可能な時間や空間を共有する、あるいは本物のライブ（生）を共有する“トキ消費”になってきたと言われている。少子高齢化、人口減少の時代を迎えている日本、地方創生、観光立国、インバウンド需要が叫ばれている現代社会において、地域に遺る建物を地元第一主義で世代を越えて遺し活用していくことが、地域愛（シビックプライド）を醸成する端緒になり、結果、地域の持つレジリエンス（しなやかな強さ）を伸ばしていくことに繋がるのだろう。

大山崎町の歴代の町長は、“天王山”という聖地がある街“大山崎町”【写真 17】を、住民の誇りのひとつにしたいと考えている。その大山崎町にある「聴竹居」は、藤井厚二が目指した「日本の住宅」の理想形として愛され、住宅を建てようとする人、住宅を設計あるいは施工する人、全てがそのスタートラインで必ずや訪れる“日本の住宅の聖地”になっていくように、地元第一主義、地域と一体となった活動を今後も続けていきたいと思う。



写真 17 ドローンによる大山崎町の天王山と緑に包まれた谷田地区周辺空撮

創建以来約1世紀の時を刻んできた「荻外荘」が杉並区によって復原・整備され、約2年後に区民をはじめ広く一般に公開される。「荻外荘」の公開を端緒に、地元の方々が地域の自然や歴史と共に、“日本の住宅”の歴史や文化を学び、“地域愛（シビックプライド）”を育む場として、地域の人々に愛されて世代を越えて活用されていって欲しい。

杉並区の皆様方が、地域の大切な文化資源として「荻外荘」を杉並区と共にまもり育てていく、そうした“地縁”を大事にした“地元力”のこれからに期待したい。

以上

参考文献；松隈 章『木造モダニズム建築の傑作 聴竹居 発見と再生の22年』 ぴあ 平成30年（2018年）3月
聴竹居ホームページ；<http://www.chochikukyo.com/>

（文中の写真で特記なきものは、すべて松隈氏提供）